



四
夕
郷
談
貳

新
196
2

13
196
2



正林

郷談 卷之二

八川豊

東都

曲亭馬琴編演

第四

頼光の髪切は擬へ

里見の重宝織月佳刀

東京大学

196

日の光やうらむ後四時見まふ代謝り。去歲と暮れ今茲と明て天文も早
 八羊よりぬ却說唐編素二郎へ。ひものけむ鮮衣が壻とひひくその夜
 徒橋氏の遺跡は居らむ名我素大夫と更り。後も守義亮の近臣の
 りしよ。君寵舊は踰るのうら。さる才学あるとあむ。只かざる魯直
 めく。主我故は俗不後。我意我張る。とるりし。偏輩を憎まば人我
 知ると難々。渠がその人となり。文学武藝は疎々。里見の主従誰か
 曉らん。義亮はねく。賢不肖我批評。年々死近臣我論。一語の
 叙。素大夫我指。汝も渠の華洛。其言。京師の他は我

江戸郷談 卷之二

ちとるりのうら。うら采地六珠さう小東南の海濱るる小巽祖安房守義實朝臣
 安房の白濱推ころり。数入城を撃ちて其基をたてたゆひより。寡人子
 至る九六世干戈をたてて止とせり。剛敵我前より受て他郷乃通路
 不使るるが目小京様の風流とせむ。耳は敵地の廣陟虚宴我々の終る
 うりしよ。この素大夫我獲るるふり。彼桃源は漢と晋のかりや世乃
 わるまひと初るゆる心地ぞまる。加旗彼のへんをたてり前つ冬上毛野るる
 仁田山や。越の軍兵我破ちりしその力素肌よりしと。一个所の法痕も履ど
 船娘我恙るる。復るる健雄之視管領は仕とをて警戦いとくえ
 額よりあり古海へ勇士の羨む大刀痕るるを。能ある畜る爪を隠るる
 文飾らど。武は誇るる。謙遜辞讓我肯とまる。公ありくやるるや。血氣は
 て守るるものも。新系とく侮らむ。渠が風俗は。彼と鏡偷のふりやん。

素大夫の傍り。願は行はるとおもやう。さうぶ丁をわき素大夫の里見殿へ
 参りしより。いまだ十年は満ざらぬと。譜代実生の近臣を同僚ふり。忌
 嫌ふ。老實するもの。義亮の言ひ。件の禊の越我は。感嘆。現
 彼継橋素大夫が。かまぐ守のめんが。え羨。くも愛。そのあむら
 幸なり。佳塔我招ゆる。妻子の慶福とる。いと喋。く。参るあり。
 妬し。あふも。うりけ。嘗。上総。末里の城。り。程。退。る。ぬ。橘。葉。村。乃
 東の。坂。市場と。唱。る。郷。宮。柱。太。く。立。上。久。り。ける。神社。あり。この。郷
 社守あり。坂戸明神と。まう。まう。或は。逆子の神。と。い。ふ。力。雄。命。檜。皮。厚。く
 昔。う。り。る。鷓。尾。懸。魚。は。細。こ。と。竭。し。朱。の。玉。籬。樸。の。雞。栖。注。進。引。り。く。く。神。々
 鄙。又。他。ひ。る。れ。社。観。あり。こ。こ。お。礼。の。毎。年。の。六。月。廿。七。日。之。廿。六。日。は。宵。宮。と
 唱。り。里。神。樂。の。社。樂。あり。瓜。蒞。我。供。物。と。ま。す。小。受。地。子。と。稱。さ。る。り。の

五葉園里

心經民大



新國

領下ことひり。素大夫君恩身はあまらう。面目は雄とめり。底心は面うて

紅血成り復さんとあひの。こゝとめをあつて。只一個の雜兵成り

寔は怪我の功名あり。加之津國なる。厄崎の戦ひは面疵を受るる物に

今宵の使者は擇とらん。當らぬもの。ごらんを。武家此儀

食らう。明と地はいひを釋とせ。鬱とせ。樂まほむ。かくて止む

君とせ。後者成り。奴隸四人は梶と昇。二人は

蕉火成照さう。主後七人速く。浦田の城戸と走り去り。坂戸市場成投て

夜に子母の比及なり。夏る不室。早稲田の風。麻衣の被成ゆ

月夜に。野于王の鳥夜。後。心地。彼變化

能と疑ひ。暗鬼と安危。歩の運びを定め。路傍の草は縮

痛の上と。踏碎け。多ひ。足り。群立堂火。素大夫。阿と叫び

退る。物をは。作廢何。あ。叫び。うち。あ

ひ。素大夫。眼成。左。右。あ。あ

比。妖物。あ。あ。あ。あ

月。あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ

あ。あ。あ。あ

扱つて主後六人、髪勢をとりつゝ、面もやぶと、髪を落し、妖物の些も懸せ。
 打ぐる、惣杖、左と右、走り、踏く。二まがら、三條引、極投、又、見を、白く、
 柱、夏、鈴丁と、打、おどろ。怯む、さう、妖物、下、を、く。前、さう、妖物、
 振り、妖物、地と、踏、おどろ。起、ん、と、さう、妖物、水田の中へ、さう、と、人、
 志、六、泥、水、發、と、滑、り。天、中、さう、ぬ、り、立、の、西、さう、さう、池、や、
 掃、り。素、太、夫、と、憑、切、さう。奴、隸、六、人、眼、前、水、田、の、泥、又、塗、ま、つ。生、死、も
 老、い、さう、さう、し、さう、粟、山、子、中、似、さう、さう、さう、さう、弓、前、の、家、又、仕、つ。妖
 東、移、と、死、と、就、ん、や。と、志、妖、激、さう。遠、妖、窺、ひ、後、方、より。声、も、ゆ、り、け、
 月、形、の、宝、刀、と、抜、く、欲、ん、と、さう、妖、物、の、眼、を、さう。刀、と、洗、く、刀、を、
 後、此、二、三、度、疲、ん、つ。朱、壺、又、落、せ、鉄、槌、と、さう、さう、素、太、夫、握、固、て、素、太、夫、が
 妖、物、髪、む、さう、り、小、礮、と、打、大、力、ゆ、り、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
 妖、物、髪、む、さう、り、小、礮、と、打、大、力、ゆ、り、さう、さう、さう、さう、さう、さう、

妖物、ひ、刀、と、捨、く、鼓、吹、抱、へ、橋、の、下、で、帷、柱、の、綱、を、妖、物、は、異、さう、さう、
 妖、物、倒、れ、さう、息、絶、さう。この、と、死、さう、さう、日、枯、せ、草、葉、さう、さう、火、を
 滅、さう、さう、さう、明、ら、さう、け、妖、物、の、莞、尔、と、笑、く、素、太、夫、と、跟、く、
 妖、物、さう、さう、衣裳、と、剥、く、さう、唐、櫃、の、棹、を、拵、り、さう、さう、さう、さう、
 さう、織、月、形、の、刀、と、取、く、打、く、さう、又、打、笑、と、鞘、搔、く、せ、と、拵、削、の、刀、と
 さう、小、集、と、り、さう、悠、々、と、ち、の、が、腰、に、跨、奴、隸、が、衣、と、さう、剥、ぐ、上、総、木、綿、の
 單、さう、さう、些、の、物、さう、さう、さう、水、田、の、中、より、ひ、り、さう、さう、引、さう、さう、時
 さう、さう、天、も、明、人、は、さう、さう、や、せん、櫃、の、内、へ、ち、り、さう、さう、さう、さう、
 大、刀、を、さう、さう、あ、り、浩、柿、と、も、へ、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
 と、ひ、り、さう、さう、唐、櫃、の、棹、を、有、い、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
 さう、さう、と、打、笑、ひ、往、方、へ、志、を、さう、さう、さう、さう、さう、さう、



あかし

これより先橋本の村長の素大夫が瘴の越浦田の城へ報知するに彼の風
 少くは裸こころとかくとるれが継橋が妻鮮衣の良人の一人と付ゆて且
 敬馬れ且歎れ又のこころより使ふ私率飯沼丁七と橋本村へ遣せし
 望院の目代苗頭お監守の命と奉りてやその処敷は素大夫の
 りの所その夜の形勢が瘴の顛末嚴し向定め。腕と彼おと復し陳て浦田の
 城おとぬるその為体嚴重なるに丁七の面み主の安否は問と叶むと只
 城おとぬる後お跟て。城中へ立ち入り。そのゆりゆりする隨主の女房お造るが
 鮮衣の夫おありと。さう雄しれりのる目お捕ふようは良人乃恥辱ふ
 遠恨の涙禁めんと母のこころをちと結ぶと女見楓の年とをせ。七うさかり
 の夏の日と秋ととごころ寂しとふゆとぬ又と待つて事りやあ。とあひ
 母の懐けおれさる。母の歎れをせと穂の薄はくと吻息と良人の安危は

尾の傍と俟たる。いと慰めかひしうける。かり後と苗頭お監の素大夫
 がやうはうと守義孝はゆえあけ。ごとも件のの共の昨夜橋本乃
 畛ゆと妖怪と撞見つ。奴隸三人投殺さす。主後四人も恙なく。さうと
 それさといと報とと起りも自在なるに。刺替代の折櫃と兼ひとされ
 月形の宝刀と紛失し。いひは素大夫の箇様。奴隸がやうはうの云と
 未女細く演し。義孝これとゆあへど。その安らうとぬとる。と敦圍し
 曲録破と鼓くわひ。放ら。彼素大夫のこの年来文武とあう。ゆ
 とあひあひ他と鳴呼する。の勇士の元と要ふとを忘し。とあや夜も
 せよ天狗おもせ。命とこれがあふ。捨ば。武士する。の客と刀城と
 るとあひあひある。暫代の不易の神。夏月形の當家の重宝。やうはう。失ひ
 言治と終る。越夜に加神奴隸がやうはう。代ゆり。小彼も。結句命

五五 卯 庚 辰 二

擲目く挑戦しんひが素大夫の戦慄せんりつ主後逐しゆご一致いちじせぬ幸さい

とのぞき実まことるやであらんぬその罪つみいよく輕かろ

大夫おほおとと引ひ拵しなみづろ者奴しやつと鞠きり向むか

こんどとくくと焦燥しやうそうぬる苗頃なへの監とら小勝せうかつとて先まづも憎にくみぬらぬとて

みくききと推おしくやとさかかどと鳴呼なげるりものと知しるごとく

夜陰よかげの使者しや或ある仰付あやうけらと刺鐵さくてつ月取げつとのぬ佩刀はいたうと預あづかりて素大夫そおとがその

罪つみと罪つみとくくかん子討こうちうつらふされちが一團いつだんの民警たみけいれまらひて却君かへきみと殘のこ

へ。今いまころも思おも意いとさうさぶ只ただ刑罰けいばつ致いた寛かんしく且かつ渠みちと助すけけあつと

室刀むろたうの往方むかうとらげ求もとめてやあつと命いのちじのつとそのくびへ命いのち殘のこ捨すて

ても寸功すんこうとさげんやかて妖怪やうきのま傍そば頭あたまと室刀むろたうやとびおんひふ入いり君きみの

目めくひのくがらせめかと鐵てつとさうのりものとわく忠ちゆう義ぎと死しせし梁りやう右みぎ直ただつと選え

蹟あともらふ影かげ後ごせまぶ公私こうしの幸さいひけしは寛仁かんじん大度たいとへ固かたまるごとくは穩ちん

使つかの侍沙汰しやたを願ねがひくゆとあそく凍こまらせむ養やう先せん此こゝ怒いかれかさうりて

軀みくお監とらと退ひくせ曲まが録ろくお頰杖はなはだ衝つて再また探たん念ねんのふ折ま正ただ木き時とき徧へんやうわり

まらふ美み光みつ端はな然ぜんと居ゐるやうくはちとち近ちかく召よせむ素大夫そおとが為ため体てい

苗頃なへを凍こ凍こ一ひと逆さか首くびとらう狐きつね視みまらせ汝なんぢへこれと何なにとと密ひそやうは問と

のふバ時とき徧へん霎せつ時とき頭あたまと傾かたむけ彼あつ苗頃なへの監とらハ素大夫そおとが其その答こた敵たてあつ親おやしく

交まじ参まじひのぬかむ君きみの面おもてを犯おつしく凍こまらせし底そこ意い目め負おの沙汰しやたは

似にくとも公道こうどうを親疎しんそは今いまお監とらがさうせし條じょう素大夫そおとが人の

らととて尊たう一ひと君きみのおんぬるとのふやゆれ又または賢けん慮りのふべうとむ金剛こんごう

神かみの妖怪やうきハその真偽まゑ或ある糺ただれぬ某その賈か母ぼは駭おど兵へいと出いで某そのも又またあつびく

みぐらう巷路ちやうろとらち巡めぐりてその在所あつちと探たん目めともほりてぬむいひ此こゝ夜よ

みぐらう巷路ちやうろとらち巡めぐりてその在所あつちと探たん目めともほりてぬむいひ此こゝ夜よ

みぐらう巷路ちやうろとらち巡めぐりてその在所あつちと探たん目めともほりてぬむいひ此こゝ夜よ

徳橋素大夫が。暫代宝刀を奪取して。為体と案索する。出沒不測の癖者。金
 剛神に候托す。掠奪する。疑ひは。緯綾や。ふ討て。あつ。彼強盗を生捕く
 宝刀とり。復さんと又。う。た。た。つ。と。伺と。竭と。凍。義。竟。た。く
 うち。あ。ひ。つ。つ。牙。予。意。稱。へ。今。素。大夫。が。罪。状。糾。く。その。頸。を。切。え。り。
 予。が。怒。の。烈。了。れ。彼。癖。者。も。か。そ。と。ま。ま。ひ。く。る。と。遠。く。走。り。た。ん。
 強。盗。一。び。の。地。と。去。て。織。月。形。の。名。刀。も。ゆ。び。返。り。う。る。う。ん。然。
 ら。伴。の。自。後。且。宿。呀。推。挽。せ。く。大。刀。と。盜。賊。を。獲。つ。る。後。は。罪。状。
 正。に。と。ち。そ。う。じ。奴。隷。へ。ゆ。く。外。は。ふ。足。下。を。死。す。る。の。ハ。華。ら。せ。傷。た。る。
 め。の。医。療。と。加。く。予。が。こ。ろ。成。ま。せ。と。叮。嚀。と。仰。へ。時。綱。公。遂。く。頭。取。
 低。く。う。け。あ。り。慈。老。の。沙。汰。と。感。涙。と。禁。あ。へ。む。ぞ。畏。う。る。と。六。繼。橋。素。
 大夫。の。ひ。が。け。る。死。過。失。と。そ。が。や。宿。呀。は。閉。籠。ら。と。人。の。排。傍。の。う。て。た。り。
 妻。鮮。衣。が。數。え。ら。さ。ん。私。率。奴。隷。も。云。云。は。の。ひ。や。せ。と。彼。は。慚。愧。を。
 ら。く。ふ。こ。ろ。家。さ。ん。世。狭。く。肩。躬。志。む。る。麻。衣。の。糾。う。が。と。死。甚。の。日。と。暮。
 か。つ。つ。早。晩。拂。ぬ。度。も。杖。ま。ね。と。旦。阿。の。風。ぞ。あ。つ。と。大。月。ろ。う。ふ。ろ。け。え。
 ある。ト。撲。傷。を。こ。ろ。く。歩。行。不。自。由。る。と。終。も。る。身。も。う。の。閑。へ。む。ら。
 う。と。五。十。日。と。限。り。み。て。切。腹。仰。け。る。色。か。ん。綁。頸。と。や。別。ら。と。ん。と。他。の。批。評。ハ。
 耳。ふ。と。や。人。相。の。淺。曉。物。さ。う。ふ。か。る。と。の。と。る。と。鮮。衣。ハ。今。又。は。や。ら。
 う。と。る。死。數。え。く。又。つ。と。と。あ。ふ。や。親。の。為。ら。女。子。な。り。朽。す。た。
 の。へ。る。吾。情。男。兒。で。あ。ら。ん。ぬ。羞。か。ち。く。阿。容。と。か。く。ま。て。は。た。り。
 ち。せ。ど。う。や。年。持。る。木。像。さ。う。と。と。夜。を。く。出。く。人。奴。逐。ひ。掠。奪。集。め。と。
 め。ん。と。あ。ら。ん。と。鈴。鹿。の。惡。鬼。大。江。山。の。変。化。と。い。ひ。昔。が。う。る。も。あ。ら。ん。と。
 仲。の。と。う。か。と。と。件。の。金。剛。神。も。批。評。は。あ。ら。ん。と。せ。盗。賊。の。所。為。る。人。と。

大川

大川

これらの真偽を探素めくその夜の賊とあつたりあつたりとひらき
 まく。良人の罪と賢人トとぞいれり。提徑る。夫婦が過世の悪業
 みづから作らぬ孽の継橋の家終果る成いと浅くなら女子の智慧
 魚死する後とひび又つ敗と俟君のるあ不忠之家のるあ不忠
 うしてやまらば父へ男女とゆらうやうと子と奉のふと親は月と家
 功徳もわく流矢は命と隕。残る吾侪へ憑からぬまふぬ倒さる。それと
 うらめば道よりさびさういふとまのさうのと神は仏も旦暮は祈は信
 家のあ女見がゑると合。家親の灵魂もあられとら受つて祐けのさや
 さといふせん。とぞいふ小物それとも身は遍る。白月の糸糸と釋つて人目
 うそれとつと泣声次の間へゆのえ々ん出居の簾推揚て痞や起りあひと
 と誰とええと譜代の老僕丁七之當下丁七の辺近く小膝と衝くや

